

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纒)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」
- こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別 -
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人? - 間(はざま)から読む聖書」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳-野宿生活者の現場から-」(松本 普)

目 次

- 敬神愛人 小野 経男 (2)
- 何か失くしたものはないですか? 八亀五三男 (6)
- “聞き上手”で、人を動かす 杉山 晃一 (10)
- 私たちを創られた神 日高 伴子 (13)



敬神愛人

小野 経男

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

(新約聖書：ヨハネによる福音書 15章12～17節)

名古屋学院大学の建学の精神は、敬神愛人であります。これを私流に今日は解き明かしてみたいと思います。

敬神と愛人は個々に独立して成立するものではありません。敬神、つまり神を敬う気持ちがあつて初めて人を愛することが出来るのです。誤解を恐れずにいいますと、神を敬うことは、神と対決することです。そして、神と対決することで愛人、つまり人を愛することが可能になるのです。その二つの接点にあるのが、僕(しもべ)という概念であります。この概念が二つを結びつけています。神と対決することにより、僕、すなわち召し使いとして神に服従する。そこで初めて他を愛することを学ぶのです。

私が話したことは、抽象的で少々理解しづらいかと思えます。では、このことを掘り下げて具体的に説明していきます。

旧約聖書の創世記32章にヤコブという人物が登場します。このヤコブは神と対立し、格闘した人物です。ヤコブの得意とするところは強靱な太ももでした。神は戦いの中で、そのヤコブの武器である太ももの関節をはずしました。その結果、神の勝利で決着がついたのです。神は対決したヤコブに対して、祝福を与えます。

ヤコブが得意とした太ももの肉は、私たちのこの日本においては江戸末期の武士道にあたります。この武士道をもっていたがために、武士たちはそれ

を誇りとして驕り高ぶっていました。昨年「聖書を読んだサムライたち」という面白い本が出版されました。そこには多くの侍たちがクリスチャンになったとありました。忠誠心をもったこの侍たちが、なぜクリスチャンになったのでしょうか。この学院にも関係のある人物、内村鑑三は「余は如何にして基督信徒となりし乎」という書籍の中で、こう述懐しています。

「封建領主に対する忠義、親と師に対する誠実と尊敬とは、これがシナ道德の中心題目であった。親の横暴と压制さえも柔和に耐えるべきであった。……危急にさいし領主に仕えるよう召されたときは、彼はその生命を塵のように軽く考えるべきだった」

それほど武士というのは、主君に絶対服従であり、全面的に忠誠心を示さなければならなかったのです。ほんのちょっとした武士の過ちも、主君が気に入らなければ腹きりを命じられたりもしました。これは新渡戸稲造の「武士道」という書物の中にも描かれています。

さて武士であった今井信郎(いまいのぶお)をご存知でしょうか。京都の見廻役の隊員で、剣道の達人でした。そして、テレビで放映されている坂本竜馬を斬った男です。今井は明治の新政府になって捕らわれの身になりますが、西郷隆盛が温情を示し処刑は免れました。そして、静岡県の牧之原という地に流されます。当時の静岡では宣教がさかんに行われていました。1874年にカナダのメソジスト教会派宣教師、D・マクドナルドが静岡の学問所である賤機舎(しずはたしや)に赴

任してまいります。

静岡に流されてきた今井は、宣教がさかんに行われている状況を目の当たりにして、「けしからん」と不愉快に思うのでした。そして、彼は「宣教師、斬るべし」といって、その斬り込み隊長になったのです。しかしその前に、この宣教師たちがしきりに語っている聖書というものを読んでみようと思ひます。当時の彼の感想は、子どもだましのつまらないものであったと述べています。ところが、ある日のこと、今井は海岸そばのキリスト教会、現在の横浜海岸教会のことですが、その前を通ったとき、ふと中へ入ってみます。そこで彼は、日本人牧師の説教を耳にします。今井は武士の時代、藩主に命がけて忠誠を尽くしていました。その牧師の話の聞いているうちに、これまで忠誠を尽くしてきた自分の過去が大変馬鹿ばかしいことだったと思えてきたのです。

全ての点で尊敬に値するイエス・キリストに人生の全てをかけてみようと思ひます。これまで忠義や忠誠を尽くしてきた藩主である自分の主人が、今度は普通の人間のレベルになったのだという確信に至ったのです。横暴さを示していた主君に対して、対決できる！と思ひ至ったのです。しかも今度は尊敬に値する新しい主人のキリストの存在に気付くことが出来たのです。「このイエスというお方は僕に成り下がり、そして自分を友として迎え入れてくれたのだ、イエスこそ信じるに値する人である！」と、まさにこれが彼の中の忠誠心が信仰心に回心した瞬間でありました。

この今井はクリスチャンになって性格が大変柔和になり、人を見下す立場を捨て、常に人に仕える立場へと変わりました。かつて全身にみなぎっていた殺気は消え、傲慢さのかけらもなくなったと評されています。聖書のフィリピの信徒への手紙 2 章 6 節から 8 節にこう記されています。

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして僕（しもべ）の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」

今井にとっては、信仰の対象であるこのキリストが、普通の人間として人に仕える僕となって現れ、神のことを全て知らせてくれたことにより、「私は道であり真理であり命である」といわれたイエスの真理を知り、その道を歩むことを学んだのです。

亀井勝一郎という哲学者がいますが、彼がこう述べています。「これは私の持論だが、思想とは何か考えたとき、私はいつもこのように考えることにしている。神、あるいは仏と対決して、それを信じるか信じないか、いづれにしても神あるいは仏に対する自己の精神的位置を決定するための持続的な戦いが、思想形成の根本である。」

神は自分に対抗してくる人間、しかも単なるフリではなく、真剣に真っ向から刃向かってくる、今井のように刀を手にしてやってくるような存在にさえ、信ずるにせよ否定するにせよ、全ての人間に対して絶対的な愛を示してください。人間を僕から友人にす

るために、自ら僕となって人に仕える愛を示しました。それが十字架の愛です。だから、クリスチャンにとっての目標は、キリストの生き方から学びそれを真似ること、キリストが示したような行いを自らの生活の中で示していくことなのです。

その犠牲的な愛を示した例を一つ紹介します。これはある日の読売新聞の編集手帳という欄にあった記事からお話しをします。T君という中学 1 年生の男の子についてです。彼は中学になってから不登校になりました。非常に真面目な性格で、ちょっとしたつまずきでも自分を激しく責める傾向にありました。彼が自ら命を絶とうとしたのは 20 歳の頃でした。ガソリンをかぶって焼身自殺をしようとしたのです。父親は、精神科医の先生から常日頃よく彼を見守っておくようにと忠告されていました。

ガソリンをかぶった息子の姿を目の当たりにしたまさにその瞬間、父親は何をしたと思われませんか？ 駆け寄って息子を抱きすくめたのです。そして、「火をつける」と叫んだのです。火がついたら、当然自分も巻き添いになり焼け死ぬこととなります。やがて息子は諦めたように泣き出し、父と抱き合っ

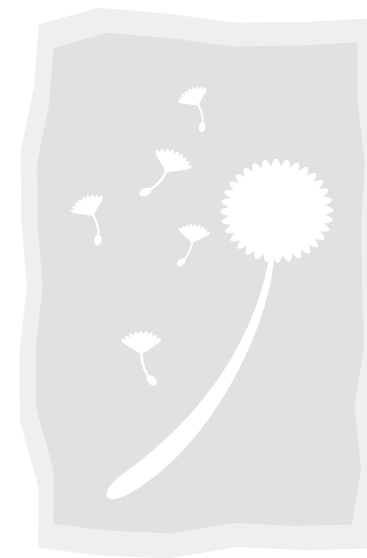
て共に涙を流しました。後になってT君は、「一緒になって死んでくれるほど自分は父親にとってかけがえのない存在だったのか、あの時初めて自分は生きる価値があることを実感した。」と振り返っていました。これが犠牲的な愛です。こういうことをキリストの十字架を通して私たちが知り、そしてクリスチャンになった人々

は犠牲的な愛を実践してきました。

皆さんご存知の、北海道で起こった洞爺丸事件もそうです。連絡船の洞爺丸が遭難し、まさに沈没のときを迎える絶望的な状況で、船に乗っていた 2 人の宣教師が、若い人に自分の救命具を与え「あなたはまだ若くて先は長い。だから、生きてキリストの証をしてください」と広い海原へと散っていった

のです。もちろん、そこまでの犠牲愛を示すことは、私たちの日常生活ではなかなか出来ないのが現実であります。しかし今一度、名古屋学院大学の建学の精神である「敬神愛人」の意味を知り、本当の祝福された生き方について共に考えておくことは、とても重要なことではないでしょうか。

(おのつねお 2010.10.12 岐阜済美学院院長 元本学教授 大学創立記念日礼拝奨励)



何か失くしたものはありますか？

八 亀 五 三 男

数年前にテレビである光景を目にしました。京都の街中を荷車で花を売って歩く女性が映っていました。そういう方たちを「大原女（おはらめ）」（大原の里から京都市中へ物売りに来る女性）と呼びますが、その女性はかなりのご年配で、モンペ姿で花を積んだ荷車を引っ張っておりました。その歩みがのろりのろりと遅いので、後続車が詰まってちょっとした渋滞が発生し運転手たちはイライラしておりました。その女性は路肩に荷車を止め、テレビカメラに向かってこう言ったのです。「車に乗ると人の顔が見えないので、人間は横柄になる」

これはどういうことを意味しているのでしょうか、少し考えてみたいと思います。

私の趣味はマウンテンバイクです。愛知県内、あるいは木曾川（木曾三川）を越えて、三重県や岐阜県まで走ることもあります。名古屋出身ではない私ですが、県内、市内の地理に関してはたぶん名古屋出身の人よりよく知っていると思います。これがもし車で国道を走っていたならば、道端で咲いているタンポポやレンゲなどの草花には気付きもしません。自転車で走っているとそれらをたくさん見ることが出来ます。荒子川を下流に向かって走っていると、やがて名古屋港近くの公園にた

どり着きます。そこでは夏にはたくさん桜の木で無数のクマゼミ、油蟬が大合唱していて、それらを横目に園内を走り抜けていきます。一生懸命鳴いている蟬や、地面に落ちてばたばたともがいている蟬などを見ると、夏の風情や厳しさを実感として感じ取ることが出来ます。

現代のような超スピード車社会では、なかなか車中からゆっくりと風景を味わうわけにはいきません。車道横で怪我をして助けを求めている人がいたとしても、気付きません。自転車や徒歩であればすぐに気付いてあげられます。逆にいうと、我々が怪我をしていても、誰も気付いてはくれないのです。私も以前、恐い体験をしました。弥富野鳥園北の伊勢湾岸道の真下をMTBで走っていた時、突然、金網で仕切られた暗くて湿っぽい細い路地に入り込んでしまい、大変な不安と恐怖と孤独に襲われたのです。「もし今、倒れて怪我をしてしまったら、誰にも助けてもらえない、怖い！」もちろん高架の上を走行している車の音は聞こえていましたが、高速道路の下には人っ子一人いません。人の気配がないのです、息づかいが全く感じられないのです。数分間この恐怖と戦いながら、やっとの思いで暗くて細い道を通り抜け、人の顔が見えた時には「助かった！」と、ほっと胸をなでおろしました。

現代の我々は空間的に接近して生活しておりますが、自分が肉体的、精神的に非常に病んでいる時、周囲の人間はそれを察知してくれるのでしょうか？現代社会にぞくぞくと普及している新型携帯電話でのメールの送受信やiPad、ゲームなど、どれも超スピード社会です。平面でもなく立体でもなく、点で生きていると言えます。つまり、横のつながりが希薄になっている気がするのです。それをある人は「絶対的孤独の恐怖空間」と例えておりました。多分、誰もがこのように感じた経験はあると思います。横のつながりがあるのかどうか疑心暗鬼に陥り、自分と他人がぼつんぼつんとばらばらに点在しているような孤独感に苛まれて、とてつもない恐怖を感じることがあります。ネットやメールで人とのコミュニケーションが取れていると錯覚を起こし、実際は心と心が通じた生身のつながりを持ってなくなっているのではないのでしょうか。もう既に、メールやネット上のつながりが、仮想的な疑似空間での脆弱な関係にすぎないことに薄々気付いている人がいると思います。それが現代社会に生きる人々にとっての「現実」であります。しかし、私にとっての「現実」は違います。相手を目の前にして、ぱしっとピンタすると、「痛い！」という声が返ってくることが現実なのです。

最近の具体例をお話します。

私は今日このように杖について座って話をしています。今は歩けるほどに回復はしているのですが、3、4週間前は前屈の姿勢で杖をつき、立っているのもやっとの状態でした（入院はし

ませんでした。生まれて初めて救急車のお世話になりました。初めて杖の助けを借りました）。なぜ、このようになってしまったかということ、外国語学部は毎年5月の連休頃に、新入生と教員が稲武にある研修センターで一泊するオリエンテーション合宿を開催します。午後からのフリータイムに、そのこの体育館で学生たちと二人三脚をして時間を過ごしておりました。その時に体育館の板と靴を履いていない足裏とが激しくぶつかり合って、右太腿の付け根を少し痛めてしまいましたが、気にせずその夜バドミントンで更に足を動かす無理をかけてしまいました。翌日帰宅後、足の痛みが和らいでいたので、その隙に少しだけマウンテンバイクで走ったのでした。その結果、遂に右足が上がらなくなり、右太腿の関節に尋常ではない激痛が走り、歩けなくなってしまいました。仕方なく休講願いを大学へメール送信すると、「気をつけて下さい」と返信がきました。メールでは声が聞こえませんし、顔も見えません。それから、教務課に休講する旨を電話しました。これも、声は聞こえますが表情がうかがえません。

なんとか次の週に杖について出講しました。学生や教職員の顔が眼前にあって、「大丈夫ですか？」と直接言葉を交わしたその時に、やっと初めてほっとすることが出来ました。一万通のメールで「大丈夫？ 気をつけてね！」と言われるよりも、顔を合わせて目を見ながら「先生、大丈夫？」と言われることの方が、その何倍も励ましの感情が素直に伝わってきて、相手の気持をうれしく受け取ることが出来ます。

もう一つ、例を挙げておきます。ある日、私のゼミ生がメールで「就職活動の面接で、ゼミの内容をうまく説明することができない」という相談を送信してきたのです。そしてその後、実際にそのゼミ生は私の研究室へ足を運び、私はその学生に顔と顔を合わせて指導を致しました。帰り際、彼女は「先生、今日ここへ来て本当に良かったです！」といままで見たこともない安堵の表情を見せてくれました。まもなく、彼女は志望していた就職先から内定の連絡を受け取りました。もし、それがメール上のやりとりだけの指導で終わっていたら、このような結果は得られていなかったと思います。

またある時、研究室で私が学生に申したことなのですが、今はネット上でたった1秒間で容易に1億人の知り合いを作ることができます。ただ、この関係は同じく1秒間で無くなりもしません。人間関係というのは時に悩みながらも、口論したり歩み寄ったり同じ時間や感動を共有し、相手との距離感を試行錯誤しながらも、こつこつと大切に築き上げていくものです。この努力があつてこそ、やっとその関係は一生継続くものとなります。「ローマは一日にしてならず」、人間関係も然りです。あるいは、コンピューターで作曲した音楽を聴くと、千回聴いても全く同じで、変化なく繰り返されます。しかし、ギタリストがある同じ楽曲を千回繰り返し演奏するとします。この場合、千回とも微妙に変化がついて、完全に同じものにはなりません。

つまりコンピューターは完全で、人間は不完全であります。その不完全さ

の中に、我々は何らかの安らぎや柔らかさ、味わいといったものを感じ取るのでしょうか。先ほどのiPadもパーフェクトな仕上がりで、機能も全く非の打ち所がありません。小説だって画面上でめくったりしながら読めてしまいます。もちろん本を実際に手にすることもないので、手も本も汚れません。文庫本を実際に手にして読書すれば、どんどん手垢がついて書籍は汚れ、時には破れてしまうことさえあります。しかしながら、そこには我々が読み込んだ証しともいふべき手垢や破れが経験、歴史として刻まれていくわけです。そういったネガティブな部分に、我々はむしろ精神的な安らぎや温かみを感じてしまうのだと思うのです。現代の生活では利便性、快適性、満足度、爽快感や迅速さ、完全を追求し、日進月歩、テクノロジーの開発や技術向上に力を注いでいます。しかし、そのただ中で人間として何か重要なことが欠落してきている気がしてなりません。何かとてつもなく大事なものを失いつつあると私は危惧しています。

人に何か頼みごとをする時、皆さんはメールでお願いすることが多くなつてはいませんか？ 私は可能な限り直接その方の研究室や各部署なりを訪れて、直接面と向かってお願いするようにしています。人に何かを依頼するのに、メールでは失礼だと思っているからです。もちろん現在の情報化社会において、特に仕事上でのメールは不可欠でありますし、全否定しているわけではありません。しかし、メールの用途について今一度見直してみませんか？と申しているのです。皆さんは気付いて

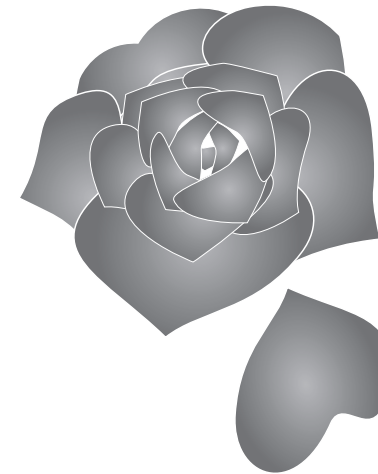
いないかもしれませんが、自分が人に対してやっていることは逆に自分もやられているということです。例えば、PC上で誰かの情報を盗っていれば、同じく誰かに情報を盗られているのです。一瞬で能動から受動に摩り替ってしまう危険性があることを十分に考慮していただきたいのです。

最初の話に戻りたいと思います。大原から花売りに来ていたおばあさんが、花を積んだ荷車の動きが遅く、後続の車が数珠つなぎに渋滞してしまったのを見つめて、「車に乗ると人の顔が見えないので人間は横柄になる」と言いました。自分が横柄なるということは、

誰かが自分に横柄なことをやっているということでもあります。

今日の私の話をまとめますと、デジタルよりもアナログ生活を是非お勧めしたいと思います。デジタル化を全面否定しているつもりはありませんが、「ファーストからスローフードへ」の発想です。冷たくひんやりとした機械よりも、温かい体温のある人間との交流をもっと大切にしてください。そしてもう一度皆さんも、自分の生活を振り返ってみて、これまでの体験と照らし合わせながらじっくりと本当の「心の豊かさ」について考えてみてください。

(やかめ いさお 外国語学部准教授 2010.6.3 カレッジアワー奨励)



“聞き上手”で、人を動かす

杉山 晃一

学生支援推進センターSプラッツの杉山といいます。今回のカレッジアワーのテーマが「学生時代に影響を受けた本」ということなので、私が大学時代に読んだ一冊の本についてご紹介いたします。デール・カーネギー著『人を動かす』という本です。ご存知でしょうか。帯の紹介文を読みますと、「世界的ロングセラー。社会人として身につけるべき人間関係の原則を具体的にイメージして、あらゆる自己啓発本の原点となった不朽の名作」と記されております。

私も学生時代にこの本を読んだことで、当時の自分なりに人とのコミュニケーションが取れるようになったと思いますし、何かトラブルや問題に巻き込まれても、うまく対処できていたのではないかと思います。

そもそも、この人を動かす本に出会うきっかけというのが、大学2年生の時にメキシコに短期留学したことにあります。大学時代にスペイン語を学んでいて、語学の勉強もですが、ラテンアメリカに非常に興味を抱いておりました。初めての海外へ行ったのがメキシコで、いわゆる先進国でない国に馴染むことが出来るのか大変不安に思っておりました。しかし、実際に滞在してみると、非常に楽しく、現地の文化にすんなりと溶け込むことが出来、これまでの私の人生の中で最高の一ヶ月間だったとさえ思える素晴らしい留学

体験でした。日本とは違って経済的には貧しい国ですが、心が豊かで、周りの家族や友人を大切にすアットホームさがとても印象的でした。

それからの私は、大学を卒業したら是非メキシコで就職したいという目標を掲げました。でもメキシコに支店がある日本の会社は大企業であり、現地のメキシコ人を相手にビジネスの交渉や商談をするための相当な語学力も要するでしょうし、並大抵の努力では叶わない夢だと、大学2年当時の私はほど遠い道のりのように感じていました。そこで何か自分を変え、さらにステップアップを望むべくヒントが欲しいと思って探していたときに、この本が目にとまりました。

なぜこの本を手にとったか申しますと、「人を動かす」という、シンプルですが非常に力強く、出来そうでなかなか出来ない内容に興味を抱きました。また、この本が1936年に書かれていて、それからずっと読み継がれているということは、長いときを経て、時代を超えて皆が共感できる真実が語られているに違いないと思ったからです。日本でも450万部売れていて、日本人にきっと受け入れられやすい内容なのだろうと読み始めることにしました。

本の内容は4つのパートに分かれていて、まずパート1が人を動かす3原則、

パート2が人に好かれる6原則、パート3が人を説得する12原則、パート4が人を変える9原則とあります。そして、巻末には付録として幸福な家庭を作る7原則が添えられてあります。この中で私が最も印象に残った一部分を抜粋して、朗読したいと思います。人に好かれる6原則の「聞き手にまわる」という章です。

「たとえばこういうことがあった。ある日、私はニューヨークの出版業者J・W・グリーンバーグ氏のパーティーの席上で、ある有名な植物学者に会った。私はそれまで植物学者とは一度も話しをしたことがなかった。ところが私は彼の話しにすっかり魅せられてしまった。珍しい植物の話、植物の新種を作り出すいろいろな実験、そのほか屋内庭園のありふれたじゃがいもに関する驚くべき事実など、聞いているうちに、私は文字通りひざを乗り出していた。私の家には小さな屋内庭園があり、屋内庭園に関する疑問を2、3もっていたのだが、彼の話しを聞いてその疑問がすっかり解けた。私たちはパーティーに出席しており、他にも12、3人あった。だが私は、非礼をもちかえりみず、他の客たちを無視して、何時間もその植物学者と話をしたのである。夜も更けてきたので、私はみんなに別れを告げた。その時、植物学者はその家の主人にむかって、私のことをさんざん褒めちぎり、しまいには、私は世にも珍しい話し上手だということになってしまった。話し上手とは驚いた。あのとき、私はほとんど何もしゃべらなかったのである。しゃべろうにも植物学に関しては全くの無知で、話題を変えてもしない

かぎり私には材料がなかったのだ。もっとも、しゃべる代わりに、聞くことだけは確かに一心になって聞いた。心から面白いと思って聞いていた。それが相手にわかったのだ。従って、相手は嬉しくなったのである。こういう聞き方は私たちが誰にでも与えることの出来る最高の賛辞なのである。“どんな褒め言葉に感わされない人間でも、自分の話に心うばわれた聞き手には感わされる。”これはジャック・ウッドフォードの言葉だが、私は話に心を奪われたばかりでなく、“惜しみなく賛辞を与えた”のである。」

この箇所を学生時代に読み、先ず驚いたのが、ただ聞いているだけで話し手になれるとはどういうことなのかと思いました。私が思う話し上手というのは、オバマ大統領のようにスピーチ力に長けていて、ビジネス交渉が巧みで、芸人のようにすべらない話を面白く語れる人たちのことだと考えていたのが覆されました。「聞き上手が話し上手である」と述べているこの本を読みすすめていくうちにわかったことがありました。確かに周りの友人たちとの会話を意識してみると、自分のことばかりをしゃべっていたことに気がきました。これからは相手の話を聞くことにポイントを置いてみよう、自分なりに意識改革を試みました。例えば相手の話に対し、「大変だったね」とか、「よく頑張ったね、凄い！それはどういうことなの？」というふうに、きちんと相槌をうって興味深く聞くことを意識的に行いました。すると、友人は喜んで話しを聞いてくれる私に対して、やがて信頼を抱くようになります。自ら

の実践を通してそのことをあらためて確信しました。

学生当時、ファミリーレストランでウェ이터のアルバイトをしておりましたが、お客様との会話のやりとりや、また大学サークルのサイクリング部で主幹を務めていたときにいかにメンバーをまとめるかで、この教訓が大いに活かされました。なにより就職活動で目標としていたメキシコに支店のある会社に就職する夢も叶えることが出来ました。

名古屋学院大学の建学の精神である「敬神愛人」について皆さんがまず身近に出来ること、それは人の話に耳を傾

けてじっくり聞いてあげることではないかと思います。自己を主張することももちろん大事なことです。話をよく聞いて相手を深く理解することでコミュニケーション力、また信頼をも得ることが出来ます。相手のためにと尽くしたことが、結果的には自己の成長へとつながっていくのです。また、聞き手が興味深く聞き入る姿勢は、話し手にとっては、どのようなほめ言葉にも勝る賛辞、敬意の表れとして映るのです。日常の会話の中でこのことを意識して、ぜひ皆さんも実践してみてください。

(すぎやまこういち 学生支援推進センター課長補佐 2010.10.14
カレッジアワー 奨励)



私たちが創られた神

日高 伴子

あなたは、わたしの内臓を造り、母の胎内にわたしを組み立ててくださった。

わたしはあなたに感謝をささげる。わたしは恐ろしい力によって、驚くべきものに造り上げられている。御業がどんなに驚くべきものか、わたしの魂はよく知っている。秘められたところでわたしは造られ、深い地の底で織りなされた。あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている。まだその一日も造られないうちから。あなたの御計らいは、わたしにとっていかに貴いことか。神よ、いかにそれは数多いことか。数えようとしても、砂の粒より多く、その果てを極めたと思っても、わたしはなお、あなたの中にいる。

(旧約聖書：詩編 139篇13～18節)

私ごとではありますが、今月私の父方の祖母が亡くなりました。1901年1月生まれで109歳でした。宮崎の特別養護老人ホームにおりまして、たった1年に一度ではありますが、私が毎年会いに行く大切な人でした。祖母の人生を歴史に重ねますと、日露戦争の頃に生まれ、10代半ばで第一次世界大戦が開戦し、戦中に子育てをし、44歳の頃によく終戦を迎えたということになります。宮崎でも小さな村の出身で、その頃の多くの人々と同様、貧しくて小学校にも通えませんでした。

たった一度だけ、祖母から八ガキをもらったことがありました。話し言葉のまま、不揃いのひらがなだけで綴ら

れた拙い文章でした。子守りと手伝いに明け暮れたという祖母の幼少時代を想像させるのに十分な八ガキの文面でした。しかし祖母は、それとは対照的に非常に勤が鋭く、理解力や記憶力にも優れ、自分の考えをはっきりと伝えることには長けておりました。

祖母は3男6女の9人の子どもをもうけました。そのうち男女2人はすでに他界しております。夫、すなわち私の祖父は、今でいうDV夫だったようで、お酒を飲んで暴力を振るい、祖母の額には手斧の背で殴られた大きな傷跡のくぼみが残っていました。その祖父も、末っ子がまだ乳児だった時分に脳梗塞で倒れ、7年間半身不随のまま亡くなってしまいました。病身の

夫を抱え、あるいは夫亡き後、9人の子どもを養うため、どれほど苦労したかは想像もつきません。旅館の皿洗い、豆腐の商い、日雇い労働、出来る限りのこと全てし尽くしたと聞きます。「いつも鬼のような形相だった」と父は当時の祖母の印象を語ります。そして祖母は、子どもたちを学校に通わせ、全員を立派な社会人に育て上げました。老齢になってからも気が強く、働き者でしたし、礼儀正しく厳格な人でした。私が子供の頃、学校から帰宅して玄関に祖母の草履が並べられ、食卓に置かれたいろいろを見れば、「ああ、宮崎からばあちゃんに来てるんだ」と大変緊張したものでした。私は長女として家の手伝いをたくさんして、祖母の前ではいい子でいることに努めました。私の中での祖母は、ただただ怖い存在なのでした。

しかしそのような祖母との関係が変わっていったのは、私が結婚をして宮崎県の都市で生活を始めたのがきっかけでした。それがなかったら、新しい交流も生まれなかったと思います。祖母は80代半ばの時、結婚したての私に、まさに苦労して得た人生の知恵を、惜しげもなく伝授してくれました。衣食住の知恵ばかりでなく、人として賢く生きることも教えてくれました。そばにいるのも息苦しく感じていた関係も、少しずつ変化していきました。

その後、私は宮崎を離れ、祖母もカトリックの老人ホームに入所し、20年余りのそれぞれの歳月が過ぎていきました。ホームに入り、100歳を越えても頭脳明晰でした。しかし、出来ることは限られていきます。それだけ

に辛くなっていく祖母は、私がいかに辛くなると「死にたい。自分は何のために生きなければならないのか分からない」と訴えていました。別れ際の決まり文句は「これが最後だから」と、まるで死期を待っているようでした。親しい友も亡くなり、末の子どもにすら先立たれて、目も耳も衰え、外界とのつながりが少しずつ絶たれていく中で、孤独であることの悲しみや辛さが、祖母の心を覆っていったのでしょうか。祖母はキリスト教の信仰をもっていました。人生の経験を重ねても、生きるとは厳しいという動かしがたい事実がそこにはありました。「死にたい、何のために生きるのか」と言われても、私には返す言葉が見つかりませんでした。もし、相手が若い人や子どもたちであれば、将来の夢を描かせたり、「生きてみないとわからないじゃない」と諭せたかもしれません。しかし、人生を100年も歩み、あらゆる労苦と、それを処する知恵を身につけた人に何とアドバイスが出来るでしょう。その時の私にとってその言葉はあまりにも重く、たじろいで逃げをうつことしか出来ませんでした。

葬儀の中で、祖母の主治医だったクリスチャンの先生が弔辞を述べて下さいました。祖母はやはり先生にも同じように「なぜ生きなければならないのか？」と気持ちをぶつけていたようでした。先生は「ばあちゃん、生きるということは、ばあちゃんには神様のご用があるということだよ」と、このようなやりとりを繰り返したと、話されました。生きていく限りあなたにはご用やお役目があるのだと…。きっと

それは何かが出来るとか、何かを成す能力が残っているとではなく、生きていくこと自体がすでに意味を成し、役目を果たしているとおっしゃっているのです。

祖母が生きていく全てをまるごと肯定しておられた、先生のその言葉に心を打たれました。確かに、何が出来るとか、あるいは何かの能力があるということも素晴らしいことですが、生きていくことがすでに何よりも価値あることなのですね。その医師の言葉によって、人を思う自分のはかりの小ささや、思いの至らなさにあらためて気付かされた思いでした。ですから私たちは、誰であれ、人が亡くなってから初めてその存在の大きさを知らされたなどということは、本来あってはならないことなのです。

悩みながら生きる祖母は同時に感謝をもって過ごしておりました。何も出来ない自分なのに、多くの人の世話と心遣いを受け、安心して毎日を送ることができるありがたさを受け止め、ありがたさと繰り返し言っていました。

(ひだかともこ 蘇原教会牧師 2010.4.23 チャペルアワー奨励)

自分の存在が受け入れられていることを実感し、幸福を感じたからこそ、もう一日もう一日と頑張れたのだと思います。職員の方々にとっては仕事として当たり前にしてくださる身のお世話も、祖母にとっては生き抜く大きな力となっていたのです。

私たちが自分の思うようにならない中で、生きていても何の意味もないと思ったとしても、「あなたは神様によって驚くべき知恵によって創られた、価値ある人なのだ」と、聖書は私たちに生きる価値の意味を繰り返し語っているのです。

「あなたの御計らいは私にとっていかに尊いことか。神よ、いかにそれは数多いことか……。」

神さまは私たち一人一人をかけがえない存在として取りあつかってくださいます。私たちもそのことをしっかり心に留め、自分自身や周りの人を大切な存在として受け止めることができるような社会を、共に築き上げていきましょう。